

カリフォルニアの風（1月号）

新しい年、明けましておめでとうございます。

元旦の太陽はとてもまぶしく、何となく新しい太陽が昇って来たように思いました。

また真っ青な空が広がっているのを見ると、これから一年かけて、カリフォルニアの青い空に皆さん一人ひとりが、どんな絵を描いていくのだろうかと思いました。

新しい年を迎えると、顔を合わせる家族の顔にもすべて改まった気分が満ちあふれているように見られるのは不思議です。改めまして、本年もどうぞよろしく願いいたします。

さて、今年最初の授業日は、どんな日になりましたか。

幼小部は、サンフランシスコ校、サンノゼ校ともに、「新年お楽しみ会」が企画されていたので、「福笑い」に「だるま落とし」、「和太鼓」演舞など、日本文化の体験を通して新年を迎えることができたことを、お友だちとともに喜び合う日になったのではないのでしょうか。

私はこの日、サンフランシスコ市内の幼小部を訪問いたしました。

皆さんの笑顔や、元気なあいさつに触れたとき、「今年も一生懸命に取り組むぞ！」という気持ちが伝わってきて、とてもうれしい気持ちになりました。

これから、学年のまとめとして大切な時期となります。修了式・卒業式までの期間、先生方やお友だちと一緒にすばらしい思い出をたくさんつくってくださいね。

今年は、「卯（う）」年です。卯年は、芽を出した植物が成長していき、茎や葉が大きくなる時期で、目に見えて大きく成長する年だと言われています。まさに今の皆さんにぴったりですね。

昨年まで「一生懸命に」取り組んだことにより、可能性という芽が出て、その可能性が大きく膨らみ、夢へ向かって飛躍するようになる年だと思うからです。その姿は、うさぎがとびはねる様子と重なります。ぴよんぴよん跳ねて飛躍していく皆さんの姿を想像していると、今年一年の成長ぶりが楽しみで仕方ありません。

ところで、うさぎにまつわる、次の二つの「ことわざ」を知っていますか。

一つ目は「うさぎの昼寝」です。油断をして思わぬ失敗を招くお話ですが、皆さんは日ごろからスケジュールをこなそうと努力しているから、これは問題なさそうです。

二つ目は「うさぎの登り坂」です。うさぎは前足が短くて坂を登るのが巧みであることから、地の利を得て得意の力を発揮することです。皆さんにぴったりのことわざのように思われます。なぜなら、皆さんは、英語を得意とし、日ごろから日米両者の文化に触れる体験をしているからです。そのなかで身に付けた力を発揮して、大いに飛躍してくれることを心から祈念し、新年のあいさつといたします。

保護者のみなさまへ

新年明けましておめでとうございます。

本年もどうぞよろしく願いいたします。

1月7日は、「新年お楽しみ会」の運営をしていただきましてありがとうございました。

おかげさまで子どもたちは、お正月ならではの遊びを体験することができました。

そのなかで、「おみくじ」のブースにやってきた子どもたちの様子です。

3つ用意されていたおみくじ箱、いずれにも、上面に片手が入る大きさの円い穴が開けてあり、箱の中には何十枚もの「くじ」が入っていました。子どもたちは、穴から箱の中に腕を入れ、「手前のくじにしようか、それとも奥の（くじ）にしようか」と指をあちこちへ移り動かし、時間をかけて一枚を引き出していました。取り出したくじを開けるや、「大吉！」とか「吉だ！」と見せ合っcoしていました。くじの中の「願い事を紙に書いて壁にはると良いことがあるでしょう。」と声を出して読んだあとの「ニコッ」とした表情が印象に残っています。

その隣のブースは「剣玉」。子どもたちのなかには、連続して皿に乗せたり柄の先端に受け止めたり、まるで球の動く軌道をすべてお見通しかのように、柄をその軌道に合わせて操っている子がいました。その隣では使いなれていない子が、皿に乗せることができるまで何度も何度も挑戦していました。その姿は、こちらが「がんばれ〜」という声をかけるのをはばかりほどの真剣さがあり、ついに皿に乗せることができたときには、こちらが思わず「やった〜」と声を出してしまいました。

このお楽しみ会を通して、子どもたちに、「おみくじ」は「希望」を与え、「剣玉」は「やればできる」という感情を味わわせ、補習校でお友だちと過ごす「心的エネルギー」を生み出させることができたように思いました。皆様のおかげです。心より感謝申し上げます。

さて、新年は先の「おみくじ」の内容に肖り、「四行の言葉」を書いて壁にはりました。

乳児はしっかり肌を離すな

幼児は肌を離せ 手を離すな

少年は手を離せ 目を離すな

青年は目を離せ 心を離すな

この言葉は、過ぎし日、上司の校長先生が日本の信州地方を訪れた際に目に止まったとお話された『子育て四訓』で、「肌や手や目を離すタイミングは、一人ひとりの子どもによっても異なり、一律ではない。子どもたちの『育ち』と『心』がその鍵を握っているように思えてならない」と、お話されました。

補習校には、生まれも育ちも、環境も異なる子どもたちが通ってきます。性格や能力、抱える課題も異なっています。私は、それらの子どもたちとお話をしたり聞いたり握手やハイタッチで触れ合ったり、一緒にお弁当を食べたりして過ごしていきたい。

それは、「おはようございます」と声をかけたときの表情、手を握ったときの握り返す強さ、向きあったときのさり気ない目の輝き、うなずきやつぶやきなど、一人ひとりの子どもとかがかわることではか感じられない、それも「心」しか感じられないものがあると思うからです。

そこで、子どもたちの「心」を「心」で感じ、肌を離しても、手を離しても、目を離しても、「心を離さない」学校づくりを通じて、子どもたちは「ともに学び・ともに遊ぶ」ことを喜び合う、子どもたちにとって、良い一年となるよう努めてまいりたいと思っています。